

## 地域における子育て・学習運動

3・11後の「知りたい」「学びたい」「伝えたい」に込める子育て・親育ちのつながりあい

大坂 祐 二

## 1 「原発出前授業」のとりくみ

北海道札幌琴似工業高等学校 川原 茂雄

今、子ども達のためにできること

士幌町育児サークルのんびり 高野 経子

これは、川原氏が二〇一一年五月から本集会までの半間に50回（その後も続けられている）、札幌市内だけでなく旭川、稚内や小樽、帯広などにも足を運び行ってきた「原発出前授業」についての報告である。平日の夜や土日に行われる出前授業は、区民センターなどの公共施設だけでなく、大学で300人の学生に向けて、あるいは喫茶店で10

人の参加者を前にしても行われてきた。

川原氏は「社会科」を教える現役の高校教員であり、原子力や放射能の専門家ではない。高校教員として初めての赴任地が高レベル放射性廃棄物処分場の候補地になり、学習会や反対集会に参加するうちに、意識的に原発と放射能について調べるようになったのである。チェルノブイリ原発事故の際には現代社会の授業で連日取り上げ、生徒からは「チェルノブイリしげお」と呼ばれた。

しかし、いくつかの学校を異動し、担当科目も変わるなかで、いつしか原発や放射能の話をしなくなっていた。福島原発の事故を目の前にして川原氏は「原発がこうなるかもしれないことを『知っていた』のに、なにもしてこなかった、なにも伝えてこなかった」、「わたし自身にも『不作為の責任』があるのではないか」と考えさせられたという。そこから「現代社会」の「原発の授業」が生まれ、また、

札幌市内で脱原発のデモを呼びかけた人たちの交流から「原発出前授業」が生まれたのである。

新聞にとりあげられたほか、多くは口コミで「拡散」した出前授業に、最初に関心を示したのはほとんどが女性であり、子どもをもつお母さんであった。川原氏はそのことに母性的な直観力を感じると語る。また、地区センターなどで出前授業を行うと「よく来てくれた」と感謝の言葉を

かけられたという。当時、札幌市の中心部ではいろいろな講演会や学習会が催されていたものの、そうした機会に行きたくても行けない人たちは少なくない。テレビなどではよくわからない原発や放射能のことについて、知りたい、わかりたいというニーズを感じ、地域に出ていくことの意味を考えさせられる。

新聞投書に見られた「しよ来、がんになりませんように」という小学2年生の言葉や、出前授業を聞いた大学生の「もう原発の話なんて聞きたくない」「これからの話を聞きたい」という反応を紹介しながら、川原氏は「希望をどう語るか」をこれからの課題として挙げる。本当のことを伝えたい、教師としてだけではなく、市民として、人間としてこの問題に立ち向かってゆく姿を子どもたちに見せたいと報告を結んだ。

高野経子氏（札幌町育兒サークルのんびり・北海道浦河高等学校育休中）の「今、子ども達のためにできること——原発のない未来を想像して」は、川原氏の講演会を地域で主催した立場からのレポートであった。そこでも、参加者から「こういうのを待っていた」との感想があったことや、札幌町だけでなく近隣からも参加者があり、「安全な社会を子ども達に手渡したい」という同じ思いの仲間がいるのだと勇気をもらえたことが報告されている。一方で、町の

後援を依頼したところ「原発反対の一角では困る」と「指導」され、チラシを町の広報に入れることができなかったなどの経緯にもふれている。

2 今だからこそ、子どもを危機的状況から守り、健やかに育てる運動を！

北海道子どもセンター 原田 勇

子ども達を放射能から守りたい、安全な社会を子ども達に手渡したい——それは多くの人たちが共有できる思いに違いない。しかし、そうした思いをとりわけ強く持つて避難してきたであろう人たちが身近にいても、その生活やニーズをうかがい知ることは難しい。道によると北海道内には105市町村に3220人が避難してきているという（二〇一一年八月二五日現在）。そのうち44%は札幌市内で暮らしている。また一〇月一四日現在で、札幌市内の小中学校には、被災地周辺から229人の児童生徒が転入している。

「厚別・白石子育てクラブ」は、厚別区・白石区に住む教員（退職者含む）などが呼びかけあい七月に設立、厚別区厚別西の雇用促進住宅に暮らす被災者（179世帯557人）への支援活動を行っている。雇用促進住宅に入居する被災者は、道が借上げた部屋を二年を限度に無料で借り受

けており、家具等は何も無い状態で入った。そこで被災者の自主組織「みちのく会」が集めた家具・家電を14階建ての各棟に運ぶ、その手伝いが支援活動のきつかけとなった。

被災者はさまざまな状態で札幌に来ており、一時的な避難のつもりで来ている人は「住民票を移していないから子どもを学校に行かせられない」と思い込んでいたり、夏休みだけの避難なので入学の手続きはしないという人もいる。しかし、避難児童生徒の特例として、2日でも3日でも入学させることができ、またそうすることで「就学支援一時金」の給付を受けることができるので、そうした制度の周知も支援活動として取り組まれた。

このほか、激励コンサート「真夏の朝のトランペット」や子どもたちの学習支援「夏プロジェクト」が行われたが、ニーズに応える支援をめざし、これらの機会に保護者へのアンケートも行われた。アンケートの結果をもとに、学習への援助と、避難者どうしのつながり、さらに避難者と地域の人たちとのつながりをつくることをねらいに「子どもふれ合いクラブ」「ミニお茶会」「教育懇談会」が行われた。お茶会や懇談会では、冬支度への心配、乳幼児の保育所等への入所、就学援助、障がいのある子どもへの支援など、多様な要求が明らかになっている。

雇用促進住宅に暮らす避難者は「桜会」という自治会を

組織している。代表の宍戸隆子さんは、避難者の総意として北電泊原発の運転停止を求める要望書を高橋知事と北電などに送り、「北海道の皆さんに私たちと同じ思いをしてほしくない」との思いをブログで発信している。同会発足のきつかけは、避難者10世帯ほどの玄関先などに汚物がまかれていたことだったというが、ブログにもさまざまな反応があり、被災地からは「ふるさとを捨てた」との、札幌市民からは「何を思い上がっているのか」との非難がある。こうしたなかで、避難者を孤立させず、安心・安全な環境で子育てできること、子どもたちが教育を受けられるようにすることが課題だと原田氏は強調した。

討論では、避難者がこのような「二重の被害」を受けていることについて、政府・東電の発表のごまかしのなかで、「自主避難」してきた人たちが非難を受けている、また、福島原発建設当時から反対運動が継承されておらず、原発についての情報が不足しているなかでパニックが起きているのではとの指摘があった。また、被災者・避難者との連帯という課題について、支援をしたいという人は多くいるが、周りの目を気にしているのではないかと原田氏が発言し、川原氏は、出前授業について妨害や嫌がらせがないか聞いてくるのは同業者であり、敵は自分たちの心の中にあると感じると応じた。

### 3 稚内の中学生の「被災地へ激励ソーラン」

宗谷教組稚内支部 阿部 諭

被災地の人たちのために何かできることはないか。震災の報道に触れ、多くの子どもたちもまた、そうした思いをもったに違いない。稚内市では、六月に行われた「中学生こども会議」での話し合いから、「被災地に行つて『南中ソーラン』を踊つて、激励・交流する」と「折り鶴を被災地に届ける」の2点について市が援助し実現することになった。九月には、以前から交流のあつた千葉県袖ヶ浦市の市制20周年記念事業「中学生ソーラン交流会」への参加を予定しており、それと併せての訪問である。

二つの目的を担つた訪問のために、稚内市街の四つの中学校から希望者を募り、21名が夏休み返上で「南中ソーラン」の練習に取り組んだ。稚内南中以外の中学生のなかには一度も踊つたことのない者もあり、同じ市内とは言え、違う学校から集まつたどうしの仲間づくりから始まる状態であつたという。稚内市は今、全国各地で取り組まれるようになった「南中ソーラン」の発祥の地として、三年に一度の「全国交流祭」開催を決め（二〇一二年はその開催年にあたる）、普及啓発にも力を入れている。ただし、市内

南地区以外の学校・生徒にとつては、それが「南中」ソーランであることで「いずい」ところもあるという。そのようななか21名は、厳しい練習を経て、稚内の中学生代表として被災地激励にむかう気持ちを高めていった。舞祝着（はつぴ）も、背中に「稚内」と入つたものが新調された。

被災地の中学校訪問は、いづれも宮城県の東松島市矢本第一中学校、石巻市湊中学校、仙台市八乙女中学校の3校を予定していた。残念ながら石巻湊中は、台風接近の影響で踊れる場所がなく中止となり、代わりに生徒たちはバスの中から被災した市内の様子を見学した。同行した阿部氏自身も、予想を上回る被災状況に、ここからどうやって立ち直つてゆくのだろうかとの思いを強く持つたという。しかし、「いろんな悲しみがあるんだろうけど、それを乗り越えて笑顔で迎えてくれた」「元気をあげに行つたつもりなんだけど、逆に元気をもらつた」というのが被災地訪問を振り返つた稚内の中学生たちの感想である。

### 4 スリランカに井戸を贈ろう PART6

北海道湧別高等学校生徒会

報告者：北海道佐呂間高等学校 奥山 輝久

二〇〇五年に始まつた募金活動の継続レポート。生徒指

導にあたってきた奥山氏が異動になったため、生徒会執行部と担当教諭への聞き取りを奥山氏がまとめるという形での報告となった。

今回の報告には「定着を見せる運動と生徒の成長」という副題が付されている。ひとつには、「生徒一人ひとりの取り組みに」「井戸設置の意義や意味をきちんと知らせることが大切」とくりかえし議論してきたことが定着を見せているということであろう。執行部の話し合いでは「テレビで見えるスリランカはけっこう大都市だし、本当に井戸を贈る必要があるのだろうか」との意見も出た。確かに首都周辺に限れば大都市なのだそうだが、大事なのはそうしたテレビの情報にも意識的に接しているということである。

また東日本大震災をうけ、「スリランカに井戸を贈ることも大事だけれど、身近なところで苦しんでいる日本人たちに対して募金することを優先すべきではないだろうか」との議論もあった。募金活動はこうして生徒たちが自分たちで考え、判断する力をつける場になっている。

話し合いの結果、生徒会執行部としてはスリランカ募金は4〜5年に1基の井戸を贈れるお金を確保することとし、当面東日本の方たちの生活が安定するまでは東日本を支援するための募金をメインにしようということになった。毎年募金と励ましの言葉を寄せているある住民は、そ

のことを知り、「スリランカ募金」と「東日本支援募金」とに分けて募金を寄せてくれたという。募金活動が地域に定着していることの表れであり、このことが「定着をみせる運動」のもう一つの点である。スリランカ募金をやめなかつたことについて生徒会長は「町の人たちの期待を裏切りたくなかつたんです」と語った。募金活動は生徒たちにとって、地域の大人たちからの期待にふれ、また大人としての考え方にふれる機会でもある。あるうどん屋さん、募金箱設置のお願いに対して「うちでも東日本の募金をお願いしています。ですからスリランカ募金には協力できるけど震災の支援には協力できません」と丁寧に答えてくれたという。

報告では、教員数減の影響で総合的な学習の時間に位置づけることができなかつた等の課題も指摘された。一方、生徒たちが、いま自分たちに何ができるか丁寧な議論し行動してきた活動を、「民主主義の取り組み」だと奥山氏は振り返る。生徒会執行部のKくんが語る、地域とのつながりや生徒の一体感を自分たちが引っ張っていくんだという使命感を持ってたという言葉が頼もしい。

## 5 響き合うPTA活動の実践―潮中PTA活動を振り返って

稚内市社会教育委員 丸山 修  
 稚内市教育相談所 平間 信雄

稚内市潮見が丘中学校の二〇〇六年度の元校長と元PTA会長による報告。PTAは先生方の力を引き出す最高最大の応援団だ、大人どうしなんだから、先生を潰すのではなく先生を褒めようというモットーのPTA会長は、五月のロードレースで、昨年の反省でダラダラ走っている子どももいると聞き、タバコをやめ朝練もして生徒といっしょに4・8キロに挑む。保護者の代表の激励を直接感じながら走ることでできる潮中生は本当に幸せだ、と校長。PTA活動を組織する「仕掛け」の鍵は「楽しさの共有」にあるという教訓を引き出す。

潮中では「親父の会」が、PTAの一部としてではなく独立したものとして組織されている。遡るとそれは「荒れ」対策の「生徒指導協力員」であった。今では農園整備、古紙回収（これが資金源）、運動会の会場設営、学校祭のバザー、通学路をスノーキャンドルで飾るなど、子ども・若者たちに誇れる安全・安心な社会づくりに毎月が親父の出番である。子どもが学校を卒業しても「親父OB会」とし

て仲間の輪に加わる。平間氏によれば「『子どものためのPTA活動』から『地域の大人としての出会い直し』であり、丸山氏によれば大人どうしの『行動しながらの親教育』『活動教育』なのである。

## 6 乳幼児期から思春期までをつなぐ父親ネットワーク

「ク」の展開と可能性

さっぽろ子育てネットワーク 吉岡亜希子

二〇〇二年の「札幌子育て・教育・文化フェスティバル」に始まる「父親の子育て学習講座」の経過と、さっぽろ子育てネットワークの活動が「全道父親交流会」へと展開するまでが報告された。活動の広がりの方、子育て中の親の参加（父親も母親も）が少なくなっており、当事者の学びあいの場をつくるのが難しくなっているのが課題である。

また、札幌の宮の森・大倉山地域で活動する地域こどもネットワーク「みんなの森」の活動が紹介された。これは二〇〇六年に中央区PTA連合会の席上で盤溪小・大倉山小・三角山小・宮の森小のPTA会長が出会ったことから始まった活動で、中学校二校を加えたPTA（というよりも地域の親たち）の広域連携である。この地域の自然環境を生かした映画づくりや雪遊び、また七夕まつりや音楽祭を取り組まれている。

このほか、宗谷管内の学校支援地域本部の取り組みから「コーディネーターから見た学校と地域をつなぐ思い」の報告があつた。

(名寄市立大学)